

SOTO禅インターナショナル

発行日 平成7年7月15日 発行人 松永然道 編集責任者 福島伸悦
 発行所 SOTO禅インターナショナル事務局 〒361埼玉県行田市下中条1619-2
 Tel. 0485-57-0999 Fax. 0485-57-2347 振替 00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

第 5 号



総会前のティク・ナット・ハン師一行と、国際課、SZI役員

主な内容

巻頭 北米開教総監 山下顕光
 特集 ティク・ナット・ハンと共に
 ・仏教を現代に蘇生させる人
 北米パイオニアバレー禅堂 藤田一照
 ・ワンダフルモーメント・清里 大場満洋
 元北米開教師・観音院

・世界仏教を見る
 元ハワイ開教師・祥雲寺副住 西沢応人
 海外だより
 ・ミルウォーキー便り 秋山洞禅
 ・ミネソタ便り 奥村正博・瑞光レディング

・クローズアップコーナー コロナ・智光
 ・前角博雄師示寂/
 ・伝道教師研修所開催/
 ・南米別院本堂落慶/
 ・SZIだより



海外開教に対する確固たる認識を！

北米開教総監 山下 顕光

元来、労働移民の心の支えとして始まった北米の布教も、七十年代の時を経て様変わりし、既に大きな転換期を迎えています。白人を中心とする多人種に曹洞禅は受け入れられ、日系の寺院ではアメリカ人の僧侶も活躍し、沢山の禅センターもできました。今後も禅の需要は伸びる可能性は高いでしょう。

その中で一番必要なのは優秀な人材とそれを活かしていくことです。海外開教ではお経を詠んでいるだけでは決して通用しません。僧侶の質と度量が問われます。仏教に関する知識は勿論のこと、宗教者として、宗侶として世の中の動きを見極める世界的視野と行動力が必要とされます。

しかし、それを担う開教師の生活は決して楽ではありません。副業を持つか、妻女が働かなければ喰っていけません。五十年の開教生活の間に、生活に追われ副業が本業になってしまった開教師も沢山みられました。もう少し布教努力ができる程度の生活の安定は必要でしょう。

金があれば布教ができないとは言えません。ですがお金も布教の大きな条件の一つです。行雲流水、寺もいらぬ、檀家もいらぬという昔の考えも確かに良い、しかし、坐禅や催物、文書伝道、文化活動など色々な角度から縁を広げる北米の布教の現実では難しいのです。

また、今の北米開教の発展も、もとを質せば日本から片道切符で送られてくる開教師と日系人達の作り上げた寺を母体として生まれました。各々が自分で寺を建てれば自分の寺と言いたくなるのが人情でしょう。しかしそれでは分派を増やすばかりです。檀家と僧侶、僧侶どうしもみんな仲良く、これが一番派閥をたてたり枠を作ったりしている場合ではありません。曹洞宗すべての僧侶と檀信徒が一つになって力を併せるときです。

そのためには宗務庁が海外開教に対する確固たる認識をもって組織を掌握し、人材の育成、財政的支援がなされるのが正道です。しかしそれ以前に宗門僧侶一人一人の深い理解が何よりも肝心です。

SOTO禅インターナショナルがその橋渡しとしての機能を努めてくださることを有り難く思い、また今後の発展に大いに期待を寄せています。

特集 テイク・ナット・ハンと共に

欧米諸国でダライ・ラマ師と共に仏教のリーダーとして高い評価を受けている詩人であり、平和運動家であるヴェトナム僧・テイク・ナット・ハン師が、四月二十八日、来日された。

関西国際空港に到着し、その足で阪神大震災で被災したヴェトナム人たちが身を寄せるキャンプ村を見舞った。翌二十九日、大阪のメイシシアターでの講演を皮切りに、比叡山での一日講習会、京都での若

い仏教者との集い、伊勢原での五日間のリトリート、そして有楽町・読売ホールでの東京講演会、清里での四日間のリトリート、鎌倉での一日講習会と、あつという間の二週間が過ぎ去った。

今号では、通訳に携わった藤田一照師、清里リトリートに参加された大場満洋師、そしてこのプロジェクトの実行委員として一行をお世話した西沢応人師にテイク・ナット・ハン師について語って戴いた。

仏教を現代に蘇生させる人

―テイク・ナット・ハン師の印象―

北米・パイオニアバレー禅堂主任開教師 藤田 一 照



約二十日間の日本滞在中、テイク・ナット・ハン師が各地でおこなった講演会やリトリート(合宿)はいずれも盛況であった。私は全期間を通訳兼スタッフとして師に随行して参加者がそれぞれに深い感銘を受けているという確かな手応えを肌で感じた。私が会場で会った一人の若者は「こういう人がお坊さんなら、そしてこういうものが仏教ならもっともとと学

んで実践してみたいという気が起きる。」とうれしそうに語っていた。ハン師はアメリカにおいても最も敬愛される仏教指導者として多くの人々に大きな影響を与えているが、今回彼と日本人との出会いの様子をまのあたりに見てその理由の一端が理解できたように思う。

仏教を新鮮で活力にあふれたものとして現代に蘇生させ、人々を啓発し続けている彼から我々は多くのことを学ぶことができる。「仏教の蘇生、再活性化」ということは我々が個人としても宗門全

によりも雄弁に具体的に彼の説く教えを物語っているのだ。彼の語る声、坐る姿、歩く姿、食事をする姿、彼の一举手一投足を見ればだれにでもそのことが自ずと感得されるだろう。それは他人の眼を意識してことさらにとりつくろったようなその場かぎりの演技ではなく、長年にわたる行の持続によって培われ彼の心身にしみ込んだものであり、「行仏威儀」という言葉にふさわしい他者への感化力を持っている。

ハン師は法話の中でよく「エンボディ」と言う英語を使ったがそれは「体現」という意味である。釈尊にならって仏教修行者、特に僧侶はその教えの体現者になるよう精進しなくてはならないと彼は言う。彼は敬虔に戒律を守り誠実に修行を続けている一介の老仏教僧であって、どこからみてもカリスマ的な教祖からは程遠いこ

く普通の人である。それでいながら同時に、我々仏教者が目指すべき静けさ、平安、英知、慈悲などの諸徳を精進の結果として体現し得た実物見本にもなっている。仏教の行の素晴らしさのいわば生き証人と言える。まず第一に彼の存在そのものが持つこうした素晴らしさにうたれるからこそ人々は信頼して彼の話に耳を貸し学ぶ気持ちになるのだろう。

彼の法話も修行法もどこまでも仏教の基本に忠実に沿ったものであり、時の流れのなかで複雑・難解・非実践的(観念的)になってしまった大乘仏教を簡素・明快・実践的な仏教の原点、原型にふたたびもどそうという熱意を強く感じた。彼自身は臨済宗に属するヴェトナム人禅僧であるが、法話のなかでは「仏陀とは」とか「仏陀の教えによれば」という表現をしばしば使い、また彼が説く瞑想法は南方仏教で重んじられている「アナパナサティ・スッタ」や「サティパターナ・スッタ」といった經典に基づいており、いわば坐禅の源流にあたるような修行法である。このように彼の示す仏教では宗派的臭みや偏りというものがなく、宗派に分かれる以前の始源的な「仏陀の教え」が一貫して説かれる。また彼の教理と実践は伝統的ヴェトナム文化の内部でのみ通用するような地域性を脱して



清里リトリート 子供たちを一番前に座らせてダルマトーク

いて現代の欧米ということになった場においても十分通用する世界性、現代性を備え専門的用語を極力避けて平易な日常語で表現される。だから仏教に初めて触れる人でも宗教的伝統を異にする人でも彼の教えを抵抗を感じず受け入れることができるのだ。

彼の態度からは仏教の有効性と価値に対する揺るぎない確信がひしひしとこちらに伝わってくる。ヴェトナム戦争以来、困難な状況の中で仏教者の立場から平和運動や難民救済運動にたずさわり、近年は自分自身が亡命生活を送りながら文化を異にする西欧の人々を相手に仏教を指導してきたという経歴からわかるように、今の彼の仏教思想と表現はそうした厳しい現実によって絶えず真価を問われ、試され、鍛え抜かれてきた成果として結実したものである。彼はこれまで生き抜いてくる過程で我々の想像を絶するような様々な困難や苦悩にぶつ

たが、そのつど仏陀の教えと実践に参じてそれを乗り越えてきたと言う。だから彼の法話や修行法は一見すると極めて平易で初心者レヴェルのものにすぎないように見えるがそういう切実な実験によって吟味、厳選された洗練されてきたもので、実は深い奥行きと尽きぬ味わいが秘められている。それを受け取る者だけのパワーを

持つことが証明されてきているのだ。彼の語る簡明な言葉がある時ふと深い意味を以て思い起こされたり、誰にでもできる単純な実践を実際にやってみると思いもかけぬ発見があったりといったことは私も含めて多くの人が経験した。坐禅修行や仏教教理の研究がいかに盛んに行われても、もしいま現に苦しんでいる人々の存在が忘れ去られ、彼らの済度につながらないならばそれにどんな意味があるでしようかと彼は問いかける。ハ

ン師は現代に生きる我々個人や社会の苦悩や不幸をハッキリと見据えそれを真に乗り越える正しい道を具体的に我々に示すという一点に焦点を絞っているように思われる。「行動する仏教者」と呼ばれるにふさわしく、彼は人々の苦しみに触れそれを癒し変容するため積極的に個人や社会に働きかけている。それは眼の前で病に苦しむ患者を援助する臨床医のようだ。だから時間の浪費でしかない戯論的な話は一切しない。

紙面の関係でこれ以上は記せないがその他にも多くのことを学ばせていただき、現在それを咀嚼しているところだ。私は八年前このヴァレー禅堂に来ることになった時、「日本文化の中でできた曹洞宗というものをアメリカという異文化のなかで一度御破算にして零から道元禅師の教えを生き生きした形にしていけ。」という課題を師匠からいただいた。現代生活の病弊に深い理解を持ち、そこから

われがこの様なハングリー・ゴーストになっているのか、その原因を語り、その状態を癒し変容をさせるにはどうしたらいいのか、その具体的方法を伝え人々が餓鬼の世界から脱出することを出すること援助することだったと思う。それを自分のこととして聞き実践を通して癒しと変容を実体験した人々を私は何人か見かけた。



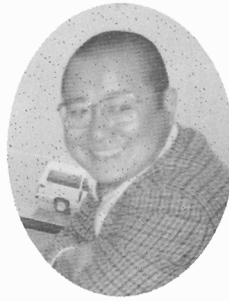
ティク・ナット・ハン東京講演会 有楽町読売ホール

の解放の道としての仏教を静かにかつ力強く説くハン師に今回直接おめにかかり話を聞けたことは、いまその課題に取り組んでいる最中の私にとってどれだけ励ましと示唆になったかはかりしれない。(今回私がハン師に随行できる機会を与えてくださったマインドフル・プロジェクト、宗務庁国際課、曹洞禅インターナショナルの皆さんに心から感謝致します。)

ワンダフル・モーメント清里

ーティク・ナット・ハン師の

清里リトリートに参加してー



元北米開教師・観音院 大場 満 洋

人達が耳を傾ける、というの妙な感慨があり実に新鮮で心地好い体験であった。

読売ホールにおける東京講演会の翌日、五月十日から十三日まで行われたリトリート（撮心）に参加した。会場は、高原列車やベンション群で知られる清里のシンボル・清泉寮と、その広大なキャンプ場に点在するコテージ等である。その環境は、ロス仏教連合会のサマーキャンプを思い出させる。約一四〇名の参加者と共に、新緑の森の静寂と安らぎの中で深く呼吸し、常に瞑想を心掛けるマインドフルな行住座臥をすごしてきた。

五月晴れのなか現地へ向かう道すがら、町ではとうに緑となった桜の花がまだ見られ、同時に山の新芽も楽しめるという、妙な興味を味わうことができた。キリスト教の施設で、フランスからのヴェトナム僧が説き、藤田一照師の通訳に、多彩な顔ぶれの若き日本

親潮と黒潮の出会い海は、豊かである。伝統の教義と現代の問題が交わる所に、実践の行が起る。自分と外界が溶け合えば、気づきが生まれる。經典と実生活が結びついて、般若（理解）が得られる。ヴェトナムは、大乘仏教と上座部仏教が出会う国である。ティク・ナット・ハン師の風貌にも、二つの異なった雰囲気重なり合って映る。一つは、農夫のような飾らぬ穏やかなほほえみである。今一つは、焼身自殺僧達の師として、また苛酷な境遇の難民達の父としての寂慮であらうか。これが、「Engaged Buddhism」なのか。

師の静かな息づかいと微笑みの語り口調によって、「八正道」は普段の行為に当てはめられ、禅の境地は当たり前のように心に生かされる。空や無常は美しい詩で表現され、



清里リトリート ティク・ナット・ハン師を囲んで



清里リトリート 最終日のダルマトークあとの集合写真

読経は優しい呼びかけとなる。Present Moment & Wonderful Moment, 「今一心二念 (Mindfulness)」などの簡潔な説明には、古色蒼然たるイメージは無く、生きた仏法の魂が蘇るようだ。

それらを理解する為に常に心がけるのは、呼吸を使って心を集中することである。中部阿含經典部二八・『念処経』の呼吸法に基づいて歌が作られ、息を調え心を集中するように導かれる。「出息入息」

は詩で唄われ、「緩歩」は移動の基本となり、「経行」は森林浴の散歩となる。そして、日常たびたび小さな鐘の音が鳴り響き、全員が己の心に接して欠欠一息をする。こうした暮らしの中で「只管」はマインドフルネスと言われ、「唯務」は「Now & Here」の問いかけとなる。その為か、最終日の昼食で発生した毒草による中毒騒動も、外国からのゲストやスタッフの多くが難を逃れた事や大事には

至らなかった事も幸いして、マインドフルネスの貴重さを痛感する得難い体験となった。苦しみを感しながら、息を吸った。心を感じながら、息を吐いた。他の悲しみを思いながら、息を吸う。他の無事を願いながら、息を吐く。平静を瞑想しながら、息を吐く。苦の消滅を瞑想しながら、息を吸う。気づきやマインドフルネスの、かけがえの無い実践となった。

不尽

世界仏教を観る

元ハワイ開教師・祥雲寺副住 西澤 応人



ティク・ナット・ハンが来日した。SOTO禅インターナショナルの一員として、ティク・ナット・ハン師の日本への招聘実行委員会に参加してきました。ハン師は、四月二十八日に来日して、大阪を皮切りに五月十五日の鎌倉まで、各地で講演会、リトリート（キャンプ）等を数多く行ないました。

SOTO禅インターナショナルでは、東京での講演会を、招聘実行委員会（マインドフル・プロジェクト）と共に、宗務庁国際課、教化研修所の協力を得て五月九日に有楽町読売ホールに於て開催いたしました。

ハン師は、近年欧米に於て名声の高いヴェトナム禅仏教僧です。今回の来日に際し、ハン師からの要望がありました。阪神大震災の被災地を訪問して、在日ヴェトナム人の慰問をしたい、というものでした。師の今回の関西でのスケジュールは大変過密なものでした。



東京講演会会場での写真展



子供たちとウォーキング・メディテーション

が、その間隙を縫っての慰問では、神戸地区のヴェトナムの人々に大きな喜びと光を与えたようです。私は、神奈川県伊勢原市での四泊五日のリトリートを終えて東京に到着した一行を、新宿駅と東京グランドホテルにて出迎えました。一行は、ここまでの長旅と休日なしのスケジュールの為にかなり疲

勞していらっしまった様ですが、全員暖かい微笑みと美しい合掌で、出迎えを受けてくださいました。さて、今回の来日をきっかけとして、師の書を読み進んで行くと、師の言葉と、私どもが接している日本の既成の仏教の持つエッセンスとの共通性を多く発見することになります。仏教の話と言うと、「難しい」「分からない」「つまらない」等の感じをもたれる方が多いと思いますが、師の話は分かり易く、またソフトな感じがします。日本語は、中国語、仏教に大きく影響を受けてきたために、古くか

らの言葉が多くそのままに残っています。そのために、現代の若い世代には受け入れられにくいところがあると思います。

例えば、『仏教の最本の世界観であり、価値観である「縁起」は、仏教の思想と実践に直結する』と説かれています。

日本語でよく使う「おかげさまで」という表現は、英語に翻訳するのが非常に難しい言葉ですが、これは、英語に相当する観念がないからで、仏教的な考え方が下地にあって発展した表現です。その下地のない社会に、仏教的考え方を理解してもらうのは大変なことなのです。

私自身、米国内で布教活動をしているときに、よくその壁にぶつかりました。日本語の「先祖」と英語の「Ancestor」、「極楽」と「Heaven」はニュアンスが違うのです。要するに違う言葉なのです。ですから、ハン師にしても、ガライ・ラマ師にしても、欧米で評価の高い仏教者は、どんな国の人にも共通の人類普遍のテーマを題材にして分かり易く仏教を説いているのです。そして、経済効率優先の社会の限界が見えつつある今こそ、オアシスとしての立ち寄りやすい仏教を、多くの人に感じていただきたいと思っています。

ハン師が説く「Interbeing」（相互存在）は、「おかげさまで」

なのです。

今、一人一人が「仏」に少しずつ近づけることが、世界が少しずつ彼岸の世界・理想の世界に近づいて行くということです。

我々の根底には、すでに何百年もの長きにわたって仏教のエッセンスが受け継がれてきている、ということを感じてください。

既刊

- ・『ビーイング・ピース』
（棚橋一晃訳／壮神社）
一九九三年刊
 - ・『ティク・ナット・ハンの般若心経』
（棚橋一晃訳／壮神社）
一九九五年三月
 - ・『マインドフルの奇跡』
（ウェップ・オブ・ライフ訳／壮神社）
一九九五年四月
 - ・『ラブ・イン・アクション』
（滝久和訳／溪声社）
一九九五年三月
 - ・『ウォーキング・メディテーション』
（仙田典子訳／溪声社）
一九九五年三月
 - ・『平和は一步一步の中に（仮題）』
（池田久代訳／春秋社）
一九九五年四月
 - ・『Touching Peaces』
（秋葉玄吾訳／壮神社） 翻訳中
- これらと主要な英文の著作は、
東京・西荻窪のナワブラサード書店
☎〇三ー三三三三ー二一八七
で扱っています。

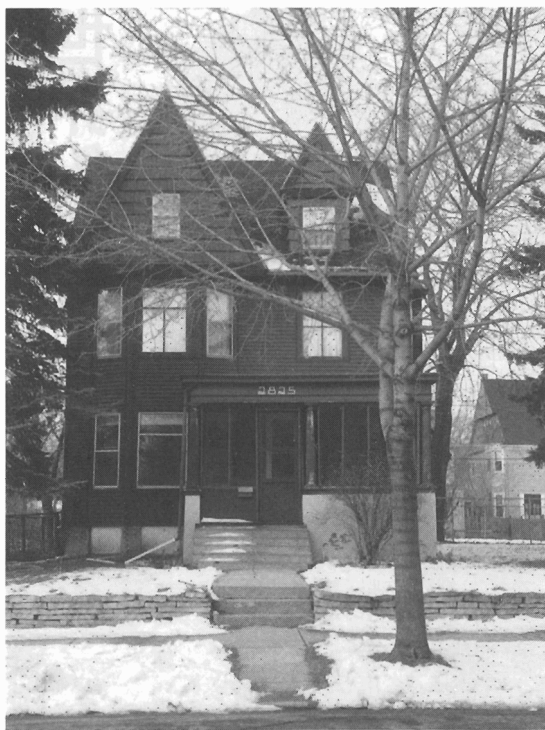
海外だより

北米ミルウォーキー便り

ホープレス・トローゼン(洞禅)

十年目の独白

ミルウォーキー禅センター 主任開教師 秋山 洞禅



ミルウォーキー禅センター建物

ロサンゼルス禅宗寺からミルウォーキー・ゼン・センターにやって来たのが、ちょうど十年前の九月初めだった。この辺りは冬になると零下三十度以下になることもあり、人々は極めて伝統的、保守的である。十年前、ゼン・センターのメンバーは十人ちょっとで、私達家族(私と家内、当時十二才の娘)の生活を支えることはとうてい不可能だった。しかも、当地はロサンゼルスと異なり日本人が少なく、英語をアメリカ人と同じように話すことができない家内がまともな仕事を見つけるのは難しかった。運よく、すぐ近くのウィスコンシン

ン大学ミルウォーキー校にパートタイムの日本語講師の口があたり、八六年の二月から私がそこで日本語を教え始めたので、家内のアルバイトと合わせて最低生活だけは確保できたが、アメリカの大学で教えるのは日本の大学で教えるのとは比較にならないほど大変で、私の要領の悪さも手伝って

日本語授業とその準備にばかり時間をとられ、禅に思うほど時間をさけないためもあり、未だに日本語を教える必要がやっつけにない状態である。しかし、おかげで「ゼン」を売り物にせずにやってこられたし、八六年九月にゼン・センターが買った家のローンの支払いも含め、この十年間大禍なくやってこられたのも、メンバーを初め多くの方々の有形、無形の援助のおかげと、感謝せずにはおられない。

伝統的、保守的なこの近辺では日曜日にキリスト教の教会とかユダヤ教のシナゴグ(ユダヤ教の礼拝のために設けた教会堂)へ行く家庭が多く、現在では行かなくても子供の時は行ったという人がほとんどである。そんな中で佛教や禅に興味を持つのは、いわゆる知識階級に属する人が多いのは当然である。そして、ゼン・センターを訪ねて来る人に聞いてみると、子供の時に親に連れられてキリスト教の教会へ行っていただけで、

どうしてもその教え、特に神を信ずることができず、佛教や禅の話聞いてこれだと思ったという人が一番多い。もう一つ多いのが、混沌とした不安だらけの社会で、また、忙しく騒がしいストレスに満ちた毎日の生活の中で、瞑想により心の平安を得たいという人達である。

まず、キリスト教、特に神を信じられない人達が佛教や禅で一番惹かれるのは、人間はだれでも佛性を有し修行によって佛になることができる、または、坐禅を修行すれば悟を開くことができるという教えである。そんな人達に、人間が佛性を有するのではなく、人間を含めてこの世のすべての存在が佛性そのものののだ、悟を開くために坐禅を修行するのではなく、修行が悟であり、悟とは修行以外の何物でもないと言っても、なかなかわかってもらえない。いったんはわかったようにみえても、すぐ又それを否定するような考えがわいてくる。

また、アメリカはプラグマティズム(実用主義)の国である。その上、目的または目標をはっきりたててそれをなし遂げ、それにみあった報酬を得よう小さい時からしつけられてきたアメリカ人に、悟とか心の平安とかいう功德などはいっさい忘れてただ坐れと言っても、納得するのは至難の業であ

る。

さらに、私達人間は、頭の分泌物である思いに振り回されて、腹をたてずにいようと、思っても腹をたてずにいられない、不平不満を言うまいと心に誓ってもつい不平不満が口について出てしまう、どうにも救いようのない存在である。坐禅は佛性、つまり大自然の働きによって生かされた無量無辺の本来の自己に目覚めることであるが、無量無辺の本来の自己に目覚めた時は、どうにも救いようのない現実の自己に目覚めずにはいられない。本来の自己に目覚めるとは、同時に、このどうにも救いようのない自己に目覚めることだと私が言うものだから、ますます混乱するようである。しかも、「救いようのない」の適当な訳語が見つからないため、ホープレス(望みがない)と私が訳すので、ホープレスどころか文字どおりデスパレット(絶望的)となるか、人間は罪人であるというキリスト教の教えと同じに考えてしまう。

佛教においては、この人間の救いようのないなさも佛性の表れの一つであり、本来それは善でも悪でもない。それに対して罪の意識を持つのも間違いである。もちろん、佛性の表れとは言っても、それは佛性を見失った姿であり、そのまま放っておいてよいわけではない。ただ、とうにも救いようのない自



禅堂

己に気づいた時できることは懺悔のみである。ただし、佛教の懺悔はキリスト教の悔い改めとは違う。日々の行ないを反省し間違いを改めようと努めることももちろん大切ではあるが、どう悔いどう改めようと思っても改められないからこそ「救いようがない」のである。佛教の究極的な懺悔とは、手を組み足を組んで只坐ることである。

本来の自己に目覚め本来の自己に生きようとの誓願に生き、その誓願に生ききれないがゆえに懺悔する、これが一番の基本であり、ぜひわかってほしいと言っているのだが、文化の違いと私の力量不足のため、なかなか理解してもらえない。数年前、宗務庁から派遣された海外開教視察団の方々に、ミルウォーキー・ゼン・センターは今後もっと

発展すると思えますかと聞かれ、そうは思いませんと答えた。禅をすれば悟を得て立派な人になることができるとか、瞑想をして心の平安を得、毎日を無事に過ごしましょうなどと言え、もっとメンバームもふえるだろう。また、最初

な話をし、後で本当に言いたいことを言えばいい、方便も時には必要だと言われることもある。しかし、一番初めに会った教えの大切さは私自身痛感しており、釈尊のように偉大な人でないが、それを要するところがいかに難しいかという例もじつに多く見てきた。どうしても、初めから一番大切な点を聞いてもらわなければならぬ。それに、やることは難しいほど面白い。こう言ったらいいか、ああ言ったらわかってもらえないかといういろいろ工夫するのも楽しいものである。観念的、理想的に理解しただけでわかったつもりになりがちでアメリカ人には特に、頭だけでなく身体で禅を知ってもらわなくてはいいけない。ということ、言葉や表現こそ違え本質的には同じことを繰り返し繰り返し言っているの、とうとうあるメンバに「ホームレス・コードー(宿なし興道)、ホープレス・トーズン」と言われてしまった。心から尊敬する沢木老師にくらべられるのは有り難いが、恐れ多過ぎる。それでも、十年同じことを言い続けて、やっと何人かはわかり始めてくれたようである。できた、もっと若い人に来てほしいところだが。

療法まで混ぜこぜにし、自称、他称のローシ、センチイがたも珍しくない。この混沌とした状況の下で最も必要なのは、見かけや目先の人数にとらわれるのではなく、百年、二百年、いや千年先を見つめて、真に一個半個の教化につとめることだろう。アメリカ禅は一時のブーム

が終わり衰退期に入ったと言っているが、とんでもない。アメリカにおいて、禅はまだ始まったばかりである。いたずらに枝葉を広げようとするのではなく、根を地下深くしっかりと張らせる時だと思

う。本年五月にロサンゼルス・ゼン・センターの前角老師が遷化された。海外のゼン・センターの指導者がたはみな早逝されるようである。過労が関係しているのかもしれない。私など指導者ではなく、どうにも救いようのない一介の修行者にすぎないが、年も考えずに無理をして身体を壊したこともある。やはり、いつ往くかわからない。しかし、命あるかぎりには全力を尽くし、アメリカ禅発展の捨石になりたいと思っている。 合掌



秋山洞禅師と参禅者たち

北米ミネソタ便り

前号にて紹介した原田道一師提唱のワンボウル・ネットワーク・ミネソタは、一鉢佛縁の草の根運動として良い輪作りができているとのこと。事務局から第一号通信、そしてミネソタより「ミネソタ宝鏡寺だより」が寄せられた。

「ミネソタ宝鏡寺だより」発刊によせて

ミネソタ禅メディアインセンセンター

主任開教師 奥村 正博

これまで、宝鏡寺は夏期（五月～十月）以外は使用不可能でしたが、創立十七年目にして、やっと少人数であります。年間を通して常住し、坐禅修行ができる道場になりました。故片桐大忍老師との御法縁によりまして、御法愛をいただいております。瑞心寺堂頭・檀崎一光老師、同堂監・檀崎通元老師をはじめ、托鉢を通して御支援を頂戴いたしました多数の日本の方々により御礼を申し上げます。

片桐老師が発願し構想しておられましたような、僧堂、法堂、庫院を備えた本格的な道場には、まだまだ道はるかではありませんが、少しずつでも確実に進んで参る所存であります。

またこの度、岐阜県正宗寺住職原田道一老師のよびかけとS

OTO禅インターナショナル会員皆様のお力添えによりまして、ワン・ボウル・ネットワークを発足させて頂き、草の根的な交流を進めて頂けるとのこと心強く存じております。

この機会に、これまで御支援いただいた方々、これから御縁を結んでいただける方々に、こちらでどのような風景が展開しているのか御理解いただければと念じ、「ミネソタ宝鏡寺だより」を発刊することに致しました。

ただ建築進行のために、経済的援助をお願いするだけでなく、坐禅を通じた日本とアメリカとの交流の場として、お互いに学び会い、共に育っていければと願っております。

Voll Summer 一九九五

『宝鏡寺の歴史と現状』

瑞光レディング（横山泰賢 訳）

平素日本の皆様には、私どもの努力に対していろいろと御助力を頂き大変感謝しております。

このニュースレターは、私共の活動について理解を深めて頂きたく、ここ二年間の宝鏡寺の様子をお知らせするものです。

まだ、宝鏡寺について良く御存じない方もおられると思いますので、簡単な歴史から始めさせて頂き、そのあと私共の建築活動と修行についてお伝えしていきたいと思っております。

宝鏡寺を設立したのは、今から三十年前日本曹洞宗の開教師として来米された片桐大忍老師です。

老師はアメリカの人々と約十年間修行を共にした後、アメリカ人僧侶を養成する修行道場がアメリカ国内に必要であることにきずかれ、一九七八年に片桐老師の下で指導を受けていた「ミネソタ・禅メディア・インセンセンター」が、ミネソタ州の南、ミシシッピー川の近くに二八〇エイカー（一・一二二）の土地を購入しました。この土地は農村地域に有り以前は農地だったにもかかわらず森林と草原に還元されており、私たちはこの自然からの恵みをそのまま保護しております。この土地購入後すぐ将来の建築に備えて、一五〇〇本の松と三〇〇〇本のくるみの木を植林し、現在松

の木は五〇フィート（十五メートル）くるみの木は一〇フィート（三メートル）まで成長しております。また、リンゴの木を二〇本植えましたが、それは毎年秋にリンゴを供給してくれます。

いま宝鏡寺には禅堂・キッチン・シャワー室・宿泊用キャビン・大工小屋が有りますが最初の数年は、禅堂の代わりに大きなテントを使い、水はわき水、電気も無く、夜になると禅堂では灯油ランプを使っておりました。一九八八年には水道を設置し、それぞれの建物に電気を引くことができました。

現在有る建物は、禅センターのメンバーや支持者の労働力の奉仕と努力によって一番最初に建てられた物で、私たちも大工仕事や配管工事ペンキ塗りをしましたが、たくさんのお金を節約できました。またこれらの建物は、大工小屋を除いてすべてが仮の物で、本来は本格的な僧堂・本堂・庫院を建てる計画でした。しかし一九九〇年頼みの綱であった片桐老師の御遷化により少しの間この夢を延期し、本格的な修行道場の建設資金を集めるあいだ修行する場所を供給するため、現状の施設を向上させるよう努力してきました。禅堂は一九八二年に山内の檜の木を切って造ら

れた物で二〇～三〇名が坐禅できます。この禅堂には単が有りませんので木製の床に座布団を敷いて坐っております。夏の摂心のときには何人かの人が禅堂で寝泊まりしていますが、ほとんどの人が禅堂のそばにテントを張って寝泊まりしています。昨年まで禅堂の窓には網戸しかなかったが、五月～十月までしか禅堂を使えませんでした。日本の方々にいただいたご寄付で耐寒用の窓やドア、薪ストーブを設置いたしました。今年は冬のあいだも禅堂が使えるようになりました。

キッチンは、禅堂と同じ時に建てられた物で、禅堂に坐れる人二〇～三〇名分の食事を準備するのにちょうどいい大きさです。キッチンの窓も網戸しか有りませんでした。が、昨年日本から托鉢で戴いてきた浄財を使って、耐寒用の窓やドアを設置し修理しました。これは、この冬キッチンを使うことを可能にしました。しかしながら、水道管の凍結を防ぐことができず、一年を通じてキッチンを使うのは難しいことです。

大工小屋は建築資材や大工道具を保管するところで、一九八八年に着手し、夏の間だけ人が来ては作業し最終的に完成したのは一九九一年のことです。この建物は材木やその他の資材がすぐ使えるよう

に保管できます。また、多くの人から寄付して頂いた大工道具（電気鋸・鑿・鉋・など）の保管場所でも有ります。あいたスペースは時に居住空間となります。この冬ある人が大工小屋の中に小さな部屋を造り、そこで寝泊まりしながら夜は小さな電気ストーブで寒さをしのぎ修行しております。

一九八二年に禅堂を建てたとき、片桐老師の為に一部屋の宿泊用キャビンも一緒に建てましたが、一九八五年瑞応寺専門僧堂の栖崎一光老師に十日間の弁道会におこし頂いたおり、バスルームと地下の寝室を建て増しました。このキャビンは、宝鏡寺に常住したい人の為に建てられた物で、二〜三名しか宿泊できませんでした。

昨年夏より改めて三〜四名の修行者や指導者が宿泊できるように建て増しを始め、冬用のキッチンやダイニングと小さなオフィスも付け加えています。これが終われば七〜八名が宝鏡寺に住むことができます。

現在この作業は完成に近く、今年の八月には完了するでしょう。これが完了すれば、一年を通じて安定した修行を維持することができ、摂心やレクチャー（講座）、など年間行事への参加を呼びかけることができます。そして、それを基盤に本格的な修行道場の建設を始めることができるのです。

次に修行についてですが、この冬

は五名の方が修行を共にしております。今まではミネソタの厳寒に対して十分な耐寒設備がなかった為、十月〜五月まで禅堂やキャビン、キッチンを使うことができませんでしたが、皆様からの御寄付によって冬に備えての適当な設備を整えることができました。

私たちは現在「ミネソタ禅メディアーションセンター」の主任開教師で、ミネアポリスに居られる奥村正博師のご指導の下で修行しております。奥村師は内山興正老師のお弟子さんで、長い間アメリカの人達と一緒に修行してこられた方です。師は常に宝鏡寺に居られるわけではありませんが、日々の修行は彰顯ワインコフ師の指導で行事しております。彰顯師は片桐老師のお弟子さんで一九八九年に老師からの嗣法をうけておられ、瑞応寺専門僧堂や聖護寺鳳山道場での修行経験も有ります。

宝鏡寺の日々の修行は坐禅と作務が中心で、五時半振鈴、六時暁天坐禅、朝課、清掃、小食、九時〜十二時作務、中食、一時半〜五時作務、六時薬石、七時半夜坐、九時開枕、となっており、四・九日は午前中作務の時間を、浄髪、洗濯、など身辺整理にあてております。火曜日の夜坐には、近くの町から三〜四名の参禅者がやって来ます。彼らは宝鏡寺開単以来の参禅者です。またミネアポリスやその他

からも時おり参禅者がやってきて、数日間修行を共にして行きます。

この冬は常にハインチ（十五・二センチメートル）の雪が積もっておりましたが、禅堂とキャビンでは薪ストーブが私達を暖めてくれました。気温が氷点下二〇度という日だけは、禅堂を使うには寒過ぎました。

三月になって雪が融けると、公道から山内まで約一キロ半の道がぬかるみ四輪駆動の車しか入ってこることができませんでした。しかしながら今は暖かく乾燥しており、私達は夏の修行を楽しみにしております。

合掌

宝鏡寺夏期行事予定

出家得度式

5月6日(土)

彰顯ワインコフ師によるジェリー・パルムス兄の出家得度

メモリアル・デー摂心

5月26日(金)〜29日(月)

国民の祝日を利用した三日間摂心

仏教修行と女性

6月2日(金)〜4日(日)

フェミニストで仏教思想家のリタ・グロスさんによる女性の為の修行講座。

宝鏡寺禅仏教紹介講座

6月9日(金)〜11日(日)

閑静な環境の中で禅仏教とその修行を紹介いたします。禅仏教についての質問やディスカッション・坐禅・応量器展鉢・作務なども行います。

摂心（七日間）

6月17日(土)〜24日(土)

ファミリー・プラクティス

6月30日(金)〜7月3日(月)

家族で坐禅や作務、食事を共にしながら宝鏡寺の素晴らしい自然を満喫しましょう。

安居（入制）

8月20日(日)〜10月1日(日)

道元禅師の教えに基づいた伝統的な修行期間、坐禅と作務を中心に奥村正博師の御指導のもと今年は知事清規を味わって行きたいと思っております。

レイバー・デー摂心

9月1日(金)〜4日(月)

労働者の記念日を利用した三日間摂心。

摂心（七日間）

9月23日(土)〜30日(土)

解制（安居終了）

編集者の声

私達は「生活の中に生きた仏教の実践」を心がけております。日本とアメリカ、お互いが廻光返照できるような交流を念じ、今後は、アメリカ人修行者の声なども交えてお伝えして参りたいと存じます。

合掌

御意見、御感想、お問い合わせは、

Hokyo-ji Zen Monastery

PO Box 331

New Albin, IA 52150, USA

曹洞宗南米別院本堂落慶奉参团

《募集要項》

- ◆旅行期間
平成7年9月1日(金)〜9月9日(土) 9日間
落慶法要 9月7日(木)
- ◆旅行代金
お一人様 385,000円
(エコノミークラス、及びお二人一室利用)
国際線ビジネスクラスご利用追加代金 551,000円
お一人部屋ご利用代金 36,000円

- ◆募集予定人員
50名（最少催行人員 30名）
・全行程添乗員が同行します。
- ◆締切期日
平成7年7月31日（月）
（但し定員になり次第締切らせていただきます）
- ◆ご利用航空会社（予定）
RG：ヴァリグ・ブラジル航空
- ◆ご利用ホテル（予定）
ロサンゼルス／ヒルトンホテル
サンパウロ／ホテルテルニケイパレス
リオデジャネイロ／メリディアン

お申込み・お問い合わせ

（詳しい資料をお送り致しますのでお電話にてお気軽にどうぞ）

JTB平塚支店

平塚市宝町3-1MNビル1F

TEL 0463-23-5166

FAX 0463-24-5292

（営業時間）午前10時〜午後6時（日曜・祝日休業）

旅行業取扱主任者 三枝敏一
担当／伊藤・石井・三枝

主催 日本交通公社

運輸大臣一般旅行業第64号
日本旅行協会会員
東京都千代田区丸の内1-6-4 千100

クローズアップ・コーナー

ロスアンゼルスより

ホスピスでの看護、それは仏教修行



北米開教総監徒弟 コロナ・智光

私はホスピスで看護婦をしながら、仏教修行しています。私の受け持ちは末期治療の患者で、医師もこれ以上治療を施すことができない人々です。そして、私の仕事は患者のみならず、患者の家族にまで及びます。人生の、最終段階においての心構えをしている患者と家族はほとんどいません。それは、医師と看護婦についても同様で、患者とその家族に対して、安らぎを提供する準備が間々ありません。その結果、残念ながら、患者とその家族はたびたび見放されたと感じ、正しい解決のための情報や指導を必要としながらも大変辛い状況に追い込まれています。私も看護婦になってこのように感じる一人です。私は、末期治療に関わっていました。末期治療では、延命のための事はすべて行なうもの

と思っていました。最初に疑問が湧いたのは、患者が「これ以上の処置はしないでください」と、訴えたときでした。患者が、現代の医学の十分な治療を受けている上で人間として扱われ、患者自身の意志で治療の決定がなされているかどうか、ということが次第にわかってきたのです。この疑問は、私にとって大きな壁となりました。患者またはその家族に最初に会い、引き受けるとき、我々に何ができるか。しかし我々は彼らに偽ったことを納得させることができせん。私は、まず患者、そして家族の話を聞くことを始めました。そして、ついに私は一般病院の重症患者の看護をやめました。なぜなら、患者はすでにどのように人生を終えて行くかという次の段階に直面し準備して、ただ私の処置する延命のための助力と技術は意味を持たなくなりました。私たちは、彼らに手を貸し、助けようとした。しかし、それは彼らの不安と動揺をつのらせるだけのようでした。

しかし、当時私はまだ、ホスピスの看護を十分理解していませんでした。末期ガン患者や、エイズ患者を私は直接看護したことはありませんでしたが、その他の病気による患者の死には直面していました。私が、自分の仕事で看護婦として働いているときは、患者を選ぶことができませんでした。しかし、徐々にガン患者やエイズ患者、そしてその家族と接し、彼らは沢山の事を教えてくれ、私も多くのことを学びました。そして常に、私は患者の立場になり看護を行ない、しかし何度かは看護が行き届かず、そのつど彼らから教えられて看護を続けてきました。如何に私の仏教修行と仕事が終わるにつくかという、私は坐禅を通して寛大な心、受け入れる心、感受性を養い、患者とその家族の感性と行動から、仏教は辛さを克服する大変貴重な教えと知らされました。ホスピスでは、主任福祉看護婦やケースワーカーが指導と話を聞く看護をしています。患者とその家族たちに安らぎを与えることを約束し、家族の患者に対する考えを聞き、その実用的、具体的、安全なアイデアの多くを取り入れて実行しています。看護婦は、患者の主治医、社会福祉の専門家、適切な家庭内における医療の情報、そして聖職者やボランティアを含めた人々と共に協力しなくてはなりません。看護のプランは、患者とその家族の

ために、それに接する全てと共に展開されます。

私の修行に話を戻すと、坐禅が私に教えてくれた寛大で自由な心は、患者やその家族に、本人がだんだん衰えて行くのを目にする辛い日々をどのように安らかに過ごすかを、彼らに話させてくれました。私たちは、お互いが話し合える機会を持ちました。私も責任上、患者と家族と、そして私自身の安全のために共に同席します。法的にも道徳的にも踏まえたことです。感情的な未解決の問題が持ち上がり、精神状態に影響を受けることにならないように留意し、家族や死に直面している患者が、互いに何をまだ未解決と感じるかを探る機会を与えることが大事なことです。この時こそ、家族との親密な関係を守らなくてはならないと思います。ソーシャルワーカーもこの看護の段階においては、大変大事な関わりであり、時に聖職者の祈りは大変重要な部分になります。これは、私の責任として、私が見た変化を家族に知らせ、変化が何を意味するか、そして何が必要かを知らせます。もし、患者と家族とが教会と密接な関係があるなら、牧師、または聖職者に、私はこのような人々を見舞ってほしいと提案します。もし教会とはあまり関係がなく必要とあれば、我々のどの宗派にも属さず、宗派の協議などを、患者または家族に押しつけない中立

的立場の僧侶を見舞わせます。もし、患者とその家族がむしろ何も無いほうが良ければ、それを尊重します。仏教の教えは、全ての創造物は最後を迎え、老いて行くことを教えます。諸行無常、諸法無我、この教えは大変私自身の役に立ち、死期を待つ患者とその家族に対しての看護のバランスを保っています。私個人の感情は彼らの要望に振り回されず、もしその時、静けさが必要であれば静けさを与え、もし手を握るのであれば私も誰かの手を握り、もし静かな言葉が必要ならば彼らに静かに語りかけるでしょう。

私の人生と修行の中で、私は「坐禅によって生かされている」という道元禅師の心理を十分に証明できます。私たちは、共に助け合う患者とその家族、そして私と全ての人が真理に立ち返り、互いに生かされていることに気がつかなくてはなりません。ティク・ナット・ハンは相互存在とよび、それは我々の喜びでもありますが。喜びと苦しみは同じです。私は仏の教えにより、心が開かれたことに深く感謝し、仏の功德を仕事に生かしています。死を否定したり、無視する社会では、ホスピスの仕事は、人生の最後の日々を迎えようとする人々にとって、紛れもなく、慰めであり救いであるはず。合掌

ロスアンゼルス禅センター主任開教師

前角博雄師急逝す！

ロスアンゼルス禅センター主任
開教師・前角博雄師は、去る五月

十五日、東京品川の桐ヶ寺（黒田
純夫住職）にて、六十五歳で示寂

された。密葬は、二十日午前十一

時より、乗炬師・余語翠庵真如臺

老師、奠茶師・泉岳寺老師、奠湯

師・大雄院老師の三仏事師により

執り行なわれた。葬儀委員長に駒

沢大学学長・奈良康明老師、副委

員長に駒沢女子大学副学長・東隆

真老師、大本山永平寺国際部長・

松永然道老師がつとめられた。な

お本葬は八月二十七日、ロスアン

ゼルスに於いて厳修される。



密葬にて 乗炬師 余語翠庵師

前角博雄大和尚略歴

昭和六年二月二十四日、栃木県
大田原市光真寺三十六世黒田白純

大和尚次男として生まれる。

駒沢大学卒業。曹洞宗大本山総

持寺安居。原田祖岳老師門下 安

谷白雲老師並びに臨済宗禾山派定

光老師門下学坂光龍老師の室に入っ

て大事を了畢。黒田白純老師に嗣

法。桐ヶ谷寺三世となる。昭和三

十一年ロスアンゼルス禅宗寺駐在開

教師として渡米。ロスアンゼルス禅セ

ンター佛真寺、並びに陽光寺を開

創。さらに黒田インスティテュート

を設立し、学長に就任す。その他

ニューヨークに禅真寺及び道真寺

を開山。フランスに法玄寺を開山。

オレゴンに地藏院を開山。その他、

メキシコ、ポーランド、ドイツ、オ

ランダ、イギリス、オーストラリヤ

等、世界各地に禅道場を建立し、

禅の高揚に努め現在に至る。多数

の外国人の嗣法の弟子を育てる。

平成六年、日米文化交流の功績

を認められ、前角老師及び白梅会

に対し、ニューヨーク州立大学よ

りハリス賞を授与される。

平成七年五月十五日、東京桐ヶ

S・F禅センター・グリーンガルチ禅堂にて

「伝道教師研修所」開催！

去る三月十三日から四月十二日

までの一カ月間、サンフランシス

コ禅センター・グリーンガルチ禅

堂において、宗務庁主催の「伝道

教師研修所」が開催された。

この研修所は、外国籍を有し本

宗の伝統に遵い、海外において教

義を敷演し、法灯の伝持に努める

伝道教師を養成するためのもので

ある。これまでに、日本の修禅寺、

大乗寺、興聖寺、そして北米カリ

フォルニア州のタサハラ禅センター

でおこなわれてきた。

このたびの主任講師には、この

研修所終了後、訪日され、滞在中

急逝されたロスアンゼルス禅セン

ター主任開教師・故前角博雄師、

そして特別講師には日本から、瑞

応寺堂監・橋崎通元師がつとめら

れた。参禅、法式、声明、作務、

宗乗、余乗、布教及

び教化の科目が設け

られ、定員十人の伝

道師をはじめ、多く

の荷担僧が弁道修行

に励んだ。

海外においての布

教教化に関して様々

な問題をかかえては

いるが、宗制見直し

によって、新しい伝

道師及び伝道教師規

程が施行されたこと

は、外国人に対する

外国人自身による法

灯伝持の道が開かれ

ことで意義深いもの

である。



略布薩 導師・橋崎通元師

グリーンガルチ禅堂にて

伝道教師とは？

伝道教師研修所を修了した者、
両大本山拝登した者をいう。なお
伝道教師は、海外において伝道師
得度を行うことができ、そのもの
に法灯の伝持を行なうことができ
る。

伝道師とは？

曹洞宗僧侶教分限規程に定める
得度登録を了じた者、あるいは伝
道師得度を了じた者をいう。



中央・主任講師・故前角博雄師

南米別院本堂落慶法要今秋九月七日に！

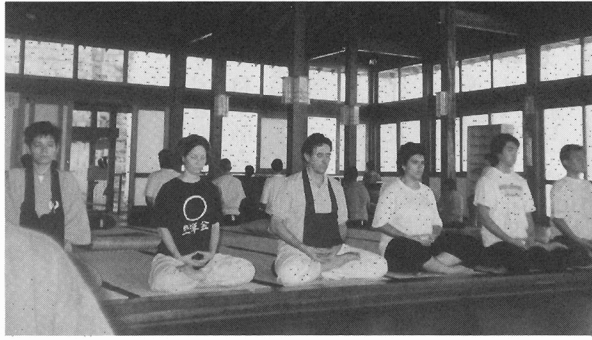
平成四年五月に南米総監として

赴任された森山大師は、各先代総監の意志を引き継ぎ、仏心寺再建復興計画に着手され、このたび本堂並びに庫裡ホール completion を迎えた。

そして、今秋九月七日に落慶法

要を厳修する。(落慶法要奉参団についての詳細は九ページ募集要項参照)

謹啓、時下尊台におかれましては益々御清栄の段、お慶び申し上げ



南米別院新本堂で坐禅する信者達

ます。

本年は、日本とブラジルが二国間の初めての修航通商航海条約を締結して以来一〇〇年目にあたり、また同時に曹洞宗管長高階禪師ご開山以来四十周年記念の年にあたります。

この意義深い年にあたり、南米別院仏心寺の本堂落慶法要が修行できますことは、不老閣親下、紫雲台親下のご慈慮、宗務庁のご協力に深く感謝申し上げます。また「杖をついてもブラジルに行くよ」と、あたたかいご支援を頂きました故丹羽禪師様、南米開教に身を尽くされた初代新宮総監老師に新本堂の報恩事業が出来ますことは、一別院の復興にとどまらず南米一三ヶ国に向けての海外開教に大いなる成果を期待できるものと確信致します。

この度、落慶法要の渡伯参拝を企画されましたので何卒、皆様のご参加を賜り、無事円成できます様、ここにご報告少々お願い申し上げます。

曹洞宗南米開教総監 森山大師

SZ I 主催

ハワイ・マウイ満徳寺九十周年慶法要参拝ツアー募集！

期日 平成八年十一月中旬

SZ I (SOTO禅インターナショナル) とは？

1. SZ I とは

SZ I は海外開教経験者と共に1993年(平成5年)2月に発足し、両大本山と宗務庁から助成を受け、ボランティア・スタッフにより運営される曹洞宗の国際布教、及び交流を推進する団体です。

2. SZ I の目的

国際化が益々急速に進展する現代社会で、異なる文化を持つ人々とのふれあいの場が増えています。そして今後、より一層国際間の交流と相互理解が切実に求められ、我々は、そのためにいかなる小さな努力をも惜しむべきではありません。この様な時代背景のもと、SZ I は海外寺院への支援と国内外の情報交換と共に、曹洞禅の実践を通し、海外の人々と友好親善の輪を広めることを目的とします。

3. 活動

- ・国内外の情報提供会報の定期的発行(年3回)
- ・海外との交流海外研修視察ツアー等へのアドバイス
- ・研修会等への講師派遣(海外寺院の様子婦人会活動、行事運営等、国際化社会での仏教、海外から見た日本仏教、その他、海外布教関係)
- ・開教師への支援
- ・その他

*活動資金は、両大本山、宗務庁、有志寺院、一般会員一人一人からの会費によって賄われています。

4. 会員資格

上記の目的、活動に賛同する人で、年会費10,000円を下記の郵便口座に振り込んで下さい。

郵便口座名義 SOTO禅インターナショナル

口座番号 00100-6-611195

5. スタッフ

会長 松永然道 副会長 大山陽堂 藤川享胤
事務局長 福島伸悦 会計 西沢応人
書記 飯島尚之 監事 田中哲彦 長田敬道
事務局 堀部明宏 大場満洋 篠田一法 大谷有為

6. 事務局

〒361 埼玉県行田市下中条1619-2

TEL 0485-57-0999 FAX 0485-57-2347

SZ I 総会報告

平成七年度総会が五月九日(火)午後二時から、東京グランドホテルにおいて開催された。松永然道会長導師により本尊上供、海外開教師示寂者追悼会、引き続き藤川享胤師の開会の辞により総会が始められた。

SZ I が後援をしておりましたティク・ナット・ハン師の来日東京講演会の予定もあり、止むを得ない事情をご理解頂きたい。

今後とも宗門国際化の一助を担って努力していきますので、会員皆様のより一層のご理解ご協力をお願い致します。」と挨拶、そして事務局より篠田一法師が議長に指名され議事へと進出した。

事務局長より平成六年度の事業報告、会計報告、そして会計監査報告、

まず最初に、松永然道会長の挨拶があり、「梅花全国大会等宗門の大きな行事と日程が重なり、会員の皆様方には大変ご迷惑をおかけいたしました。日程の設定には

まず最初に、松永然道会長の挨拶があり、「梅花全国大会等宗門の大きな行事と日程が重なり、会員の皆様方には大変ご迷惑をおかけいたしました。日程の設定には

まず最初に、松永然道会長の挨拶があり、「梅花全国大会等宗門の大きな行事と日程が重なり、会員の皆様方には大変ご迷惑をおかけいたしました。日程の設定には

事務局長より平成六年度の事業報告、会計報告、そして会計監査報告、

告がなされ、満場一致で承認された。次に平成七年度の事業計画案、会計予算案が事務局から提出説明があり、満場一致で承認され、藤川享胤師の開会の辞により総会を終えた。

総会修了後、別室にて親睦会が開かれた。諸般の事情により参加者は少なかつたものの「ティク・ナット・ハン師東京講演」までの時間を楽しく有意義に過ごした。